

IPAの原点とその発展について

(翻訳 山崎篤 日本精神分析協会 精神分析的な精神療法家研修生)

かのフロイトはしばしば深い郷愁をもって、彼が精神分析を打ち立てていった「素晴らしい孤立」の10年間のことについて触れたという。この10年間というのは、1894年に彼がブロイラーとの共同研究に見切りをつけ、結果として誰一人として議論する者がいない中、単独で仕事を続けることを余儀なくされたその年に始まった期間のことを指しているのは疑いない。とはいえ、フロイトからフリースへの書簡が公刊されたこともあって、我々はこの二人が非常に頻繁に手紙をやり取りしており、実のところフロイトが彼の発達し続ける考えについての相談役としてフリースを利用していたことを知っている。しかもフロイトの考えのいくつかのものは、明らかにフリース自身の理論から影響を受けたものであることも知っている。さらにこの二人は、フロイトが冗談めかして、二人の「集会congresses」と称したよう何度も実際に会って来た。この「集会」という言葉が用いられたことは、やがて結果的にIPAが組織され、集会が開催されることになる事態の前触れとなった。というわけで当時のフロイトが、自らの研究と臨床において全く孤立していたわけではなかったと言える。とはいうものの、フロイトが孤立を感じていたのは確かなことであろう。実際のところフロイトの住むウィーンでは誰の協力も得られなかったのは事実だし、なにしろフリースはベルリンに居たのであるから。

1902年、フロイトの患者であったシュテーケルの発案だったのであるが、フロイトは彼の研究について議論するために4人の男性（シュテーケル、アドラー、Kahane, Reitler）らと会合を持つことになった。彼らはその会合を心理学的水曜協会（Psychological Wednesday Society:水曜会）と呼び、以来彼らは毎週水曜日に会合を持つようになった。1908年までには、この会合には14人のメンバーが集うようになり、会の名称もウィーン精神分析協会と改められた。フェレンチがこの協会に入会したのは、まさにこの年である。協会のメンバー以外にも、この会合には後に精神分析にとって重要な役割を果たす者たちがゲストとして招かれることもあった。すなわちEitingon, ユング、アブラハム、ジョーンズ等である。それらの者たちはいずれも後にIPAの会長となった。

IPAについての動画

歴史的な場面と、口頭でのインタビューやコメントが含まれるものであり、2010年IPAのためにLee Jaffeによって作成された。Nadine Levinsonによって制作され、Leo Rangellによって監修を受けている。

1907年にジョーンズはチューリッヒのユングを訪問した。この時点でのジョーンズはフロイトにはまだ面会したことはなかったものの、フロイトの著作に精通しており、1906年

の終わりからロンドンで自らの患者に対して、精神分析的技法を実践していた。この訪問時にジョーンズは、様々な国から精神分析に関心を持つ者を集め、精神分析における彼らの共通する関心事について議論するための国際的な会合を持ってはどうかと、ユングに進言した。この点から言えば、やがて後にIPAとして形をなしていくものを最初に思いついたのは、このジョーンズであったのかもしれない。ユングを通じてフロイトはこの提案を歓迎した。そしてザルツブルグが、この会合を開くには最も良い場所だろうと選んだのもフロイトだった。ジョーンズはこの会合の名称を「国際精神分析大会 International Psychoanalytical Congress」とすることを望んでいたものの、ユングは「フロイト派心理学のための第1回大会 First Congress for Freudian Psychology」とすることに決めてしまった。とはいえ、この大変に非公式な会合が、最初の精神分析に関する国際的な集会であったと、現在ではみなされている。国際精神分析協会はまだ、設立されていなかったが。

精神分析に関わる国際的な協会を設立することが議論され、大方の同意が得られたのもこのザルツブルグでの会合においてである、1908年4月27日のことだった。この重大な決定を別にしても、フロイトがラットマン事例のプレゼンテーションを行ったという点で、このザルツブルグでの会合は特筆すべきものだった。このプレゼンテーションは大変な関心と呼び、フロイトは4時間以上にそのプレゼンテーションを延長せざるをえなかった。その次の会合は、1910年5月にニュールンベルグで開催され、この会合で国際精神分析協会（以下IPA）が設立されることが正式に決定された。フロイトはフェレンチとはザルツブルグでの会合の前にほんの少し面会しただけであったが、二人の友情は急速に熟していったようだ。ザルツブルグでの会合の後でフロイトは、フェレンチに対して次のように求めた。すなわち、一つの結束のもとに精神分析家たちが相互に意見交換や研究成果を語り合う組織を設立するように提案することである。それを受けて、フェレンチはニュールンベルグでの会合において、この提案を行ったというわけだ。そこで彼は、ユングが新しい組織、協会の会長となるように主張し、その協会の事務局を（ユングが拠点置いていた）チューリッヒにおくべきだと提案した。フロイトもいくつかの理由から、そうすることが重要であると考えていた。というのはまず何より、フロイトはユングのことを大変に高く評価していたのである。ユングとの交流をもった1年の間に、フロイトはユングを彼の精神的な継承者とみなすに至っていた。精神分析の未来を最も安全裡に預けることができそうだと考えていた。またフロイトは、精神分析がウィーンというヨーロッパの中の一地方でのみ行われているものとしてはみなされることのないように、そしてユダヤ人特有のものともみなされないようにすることが高度に重要なことだと信じていたのである。その点ユングはスイス人であり、かつキリスト教徒であった。フロイトには、彼こそが精神分析のリーダーとして最も適しているように見えたのであろう。結果としてユングはIPAの最初の会長に選出され、中央事務局はチューリッヒにおかれた。チューリッヒは会長であるユングがその拠点を置いていた場所である。

続く数年の間、IPAにまつわる様々な事柄は、書記であるRiklinとともにユングによって処理された。1911年6月、アドラーが数名のメンバーと共に、ウィーンの協会を退会した。彼は個人心理学に関する彼自身のサークルを立ち上げたからである。これと同じくして、シュテーケルは協会が発刊していたthe Zentralblattから手を引いてしまった。このことはフロイトには不満なことであったが、やがて1912年10月シュテーケルもまたウィーン協会を去ることとなった。

その間、第3回大会が1911年9月ワイマールにてとり行われた。この時、IPAには106人のメンバーがいたことが報告されている。この大会では、新しく設立されたアメリカのニューヨーク協会とアメリカ精神分析協会とが正式に承認された。それまでThe ZentralblattはIPAの公式機関紙だったが、フロイトが1913年に発刊し、フェレンチ、ジョーンズ、ランクによって編集されていたInternationale Zeitschrift für Psychoanalyseがこれにとってかわった。この機関紙は1941年まで発行し続けられた。加えて、Imagoが1912年に応用精神分析のための機関紙として出版されることになった。ワイマールの大会では、ユングが会長に再選され、次回の大会は2年後1913年にMunichにて開催されることとなった。

その間、フロイトとユングの関係は二人の間の深刻な相違のために、悪化していった。そこには学術上の違いとそして個人的特性の違いがあった。1913年の始まりに、彼らの個人的な関係は相互の同意のもとに終わりを迎えた。にもかかわらず、ユングはIPAの会長を続け、1913年9月に開催されたMunichの大会を主催することにもなった。会員からは多くの不満が噴出した。実際アブラハムは、ユングの再選が提案されたならば、不満を持つ者は投票しない行動に出るようにと示唆した。そしてその結果、52人のうち22人が投票しなかった。しかしながら、ユングは選挙の後ですぐに、自らの立場を守ることが難しいものであることを認識し、翌4月には会長を辞してしまった。ユングがいたチューリッヒ協会は、7月にIPAから離れた。このようにして、ユングと精神分析との間の最後のつながりも、厳しいものとなった。

フロイトはアブラハムが、1914年9月に予定されていた次期大会までの間、暫定的な会長となるように示唆した。しかし8月に大戦が勃発したために、その大会の開催は断念せざるを得ず、1918年9月にブタペストで開催されるまで、大会が開かれることはなかった。しかしこのブタペストでの大会に参加した者のほとんどがオーストリアかハンガリーからの参加者で、ドイツからは3人、オランダからは2人、ポーランドからは1人であって、決して国際大会とは呼べるような状況ではなかった。フェレンチが会長として選出されたが、ハンガリーとオーストリアの敗戦に続く混乱した状況のために、彼は自分が会長としての役割を果たせないものと考えた。そこでジョーンズに対して暫定的にその役割を果たすよう求め、ジョーンズが会長職を代行することになった。

第一次世界大戦は、IPAの活動に一つの中断をもたらした。IPAが設立された目的は、様々な国で活動する精神分析家たちの間のつながりを形成することであった。そのための手段として、科学的な論議を活発に行うための場として国際的な会合を組織してきたのである。また、それぞれの協会での活動に関する情報を伝えるためには、何らかの形での会報を出版しなくてはならなかった。さらには学術研究誌の創設も求められていた。これは結局、*Internationale Zeitschrift* と *Imago* という二誌に結晶化されることになっていった。

さかのぼって1912年、アドラーとシュテークルが協会から公的に脱退することになり、そしてその後ユングが同じ道をたどることが明らかなものとなったとき、ジョーンズはフロイトにこそ従うことにした。そして精神分析が信じるところの多くに対して忠実であろうとすることにおいて、完全に信頼のおける者たちからなる、ある秘密の委員会を設けることになったのである。当初その委員会は、ジョーンズを委員長とし、フェレンチ、ランク、アブラハムがメンバーであった。Eitingonが1919年に加わった。この委員会のメンバーはそれぞれ、他のメンバーとその学術的見解については相互に議論することを徹底することとし、それを経たうえでなくては精神分析理論が基本的に信ずるところからはいかなる逸脱（あるいは展開）をも公的には行わないと誓いを立てていた。全会員に対しては、ニュールンベルグでの大会でこの秘密委員会のメンバーであったフェレンチから、より受け入れられやすいような文言での会員としての身分に関する保障内規が提案された。以後、IPAの活動の基本方針は、その委員会が代表する「Old Guard（いにしへの監視者）」に従うことになった。IPAは、その会長ではなく、この秘密委員会の影響下に置かれることになったのである。そのようなわけで、この1912年の時点で既に、もはや精神分析からの逸脱が明らかとなっていたユングにとって、この秘密委員会の意向と、一方で会長であるユングのリーダーシップのもとに行われることになるIPAの公的な活動との間には、越えられない溝ができてしまうことは明らかであった。ジョーンズは、この委員会が10年にわたって満足理に機能していたと語っている。これは、この期間のIPA内の結束を進めるだけでなく、これは推測であるが、IPAそのものにおいて寡頭政治（もしくはエリート集団？）として記述されるかもしれないものが、伝統として作り上げられたのである。

19年から20年代にかけての時期には、ランクと秘密委員会の他のメンバーとの間に深刻な困難が深まっていった。彼はこの委員会を去ることになり、1925年にアンナ・フロイトが代わりにメンバーとなった。

しかしながら、この秘密委員会は最終的に1927年に完全に解散した。

戦後、1920年にハーグにて大会が開催された。この集まりは1918年のブタペストでの会よ

りも国際的なものであった。戦争によって分断を余儀なくされていた精神分析家たちが集った。62名の参加であった。イギリスとスイスの協会が公式に認められ、ジョーンズが会長に選ばれた。

1919年の1月、フロイトによってThe Internationaler Psychoanalytischer Verlagという自費出版社が立ち上げられた。精神分析の書籍の出版を独自に行えるようにするためであった。ブタペストのFreund公から相当な額の資金提供が行われる約束があったが、残念なことに彼は1920年1月に亡くなってしまった。どうしようもない困難が立ち上がった。多額の資金が入手困難となったのである。ランクはとりわけ懸命にこのVerlagの仕事をこなした。そしてジョーンズも積極的に関与し、特にイギリスでの出版にかかわった。結果として彼は、国際精神分析図書館を立ち上げ、国際精神分析誌the International Journal of Psycho-Analysisを創設した。最初の巻は、1920年に出版された。

1922年にベルリンにて、第7回大会が開催され、2年ごとに大会がとり行われることが承認された。ジョーンズが会長に再選され、書記は会長と同じ協会に所属しなくてはならないという前例を破り、アブラハムが書記として選ばれた。

次の大会は、初回と同じザルツブルグで開催された。初回の大会の参加者が22名であったことに比較して、263名ものIPA会員が参加したことが報告された。Bad Homburgでの次の大会は、とりわけ重要なものであった。アブラハムが実行委員長を務めた。精神分析の訓練に関して議論する予備的なカンファレンスが開かれ、均一の基準をもった分析家を訓練するための国際訓練組織を立ち上げようということが提案された。各協会から代表者が招待された。フェレンチが議長だった。Eitingonが多くの重要な基本規則の提案を行った。そこでは、精神分析家としての訓練は、個々の精神分析家の各自の裁量に委ねられるべきではないとされた。そうではなく、それぞれの国々において統一された訓練インスティテュートを提供すべきであるというものだった。さらにそれらのインスティテュートでの訓練規則はIPAによって正式に規定されるべきだとした。この訓練には「教育分析」instructional analysisを受けること、そしてスーパービジョンを受けながら患者を分析することが含まれていた。精神分析の実践を志す者は誰もが、IPAの会員となる前にこれらの訓練を終了しなくてはならないものとされた。それぞれの協会支部は、7人を超えない範囲での訓練委員を選出しなくてはならず、これらの委員は協力して国際訓練会議International Training Board（のちに機関Commission ITCと改名された）を行うものとされた。この会議は、精神分析の訓練に関するあらゆる質問に答えるためのIPAの中心的機関となるものだった。Eitingonがこの訓練会議の最初の議長に指名された。

ジョーンズはこの大会でアメリカの分析家とヨーロッパの分析家との間で、素人（これは非一医師ということである）分析の問題を巡って、深刻な対立が起こりつつあることに気

づいていた。フロイトもフェレンチも訓練志願者に対して、医学的な教育を受けないように実際のところ説得していた。ところが一方でアメリカの分析家たちは、アメリカではいかさま分析家が広く出現していたことがあるために、彼らに対しては、少なくとも医学の学位を取得することを必修とすることを主張していた。ジョーンズとEitingonは中間的な立場をとった。すなわち、医学的訓練は推奨されるとしても、必修ではないという立場である。最終的に会議では、ITCに対して志願者が訓練に入るための諸条件についての基本的枠組みを作成するように求める決議を採択した。そしてこの基本的枠組みが作成されるまでは、いかなる活動も行わないようにとも決議した。Eitingonがこの基本的枠組みを作成するために指名した委員は、ベルリンの会員から構成された。しかしこの委員会が下した結論は、多くの協会支部を失望させるものだった。次の大会の際に、ジョーンズを委員長として、新たに、真の意味で国際的な委員が指名された。その委員会から出された報告は、1932年にWeisbadenでの大会にて異議なく承認された。その報告では、素人lay onesを含む候補者の選択に関する規則は、個々の協会の裁量に委ねるべきであるとされた。

アブラハムがBad Homburg(1925)の大会で、IPAの会長に再選された。しかし、彼が大会から数か月して没してしまっただので、Eitingonが彼の代行をすることになり、さらにアナ・フロイトが書記として代わりを務めることになった。

インスブルック（1927）の大会で、Eitingonが正式に会長に選出された。例の委員会は、秘密組織としての役割を終えた。この委員会がこれまで担ってきた役割は、協会の幹事によってとり行われるようになった。すなわち、会長、二人の副会長、書記と会計担当であり、これらの者は、通常中央執行部として呼ばれることになった。1929年には、大会は初めてヨーロッパ大陸を離れて開催された。オックスフォードである。Eitingonは、協会の発展が非常に緩慢であることに気づいた。彼はその理由を、会員になるためには分析を受けなければならないことが、あまねく強調されていることによるものと考えた。3年後再びWeisbadenで開催された大会で会長に再選された。1931年から1932年への延期は、ドイツの国内事情によるものだった。深刻な経済状態にあったのだ。Eitingonは今や7か所の訓練インスティテュートがあり、新しく開設されるものはベルリン、ウィーン、ロンドンで行われている訓練方法に従うものと報告した。

この新しい訓練に関する副委員会sub-committeeは、訓練への導入と訓練に関して唯一の権限をもつのは、訓練委員会Training Committeeであることを、あらためて知らしめる勧告を行った。すなわち素人候補生lay candidatesを採択するかどうかに関するルールは、それぞれの訓練委員会Training Committeeに委ねられるべきものとしたのだ。ただ、その規則の中にも例外を認める余地は残されてしかるべきであるとした。いかなる者も自ら精神分析家の資格に値すると標榜するには、その訓練委員会が十全に足るとみなすまで自身の訓

練を積み上げていかなければならないのである。素人候補生 lay candidates は、決してコンサルテーションの仕事には携わってはならないことを約束させられた。というのも患者を紹介するコンサルテーションの仕事は、法的に責任が取れることが必要とされたからだ。なお訓練は少なくとも3年間は続けなければならず、その間には正式な委託を受けた分析家からの訓練分析と同様に、2年間の学問的研鑽を積まなければならない。そして2例の「統制された」（すなわちスーパービジョンを受けた）分析を、それぞれ少なくとも一年以上にわたって行わなければならないのであった。関連する諸領域での非分析的な研究も、推奨されなければならない。素人分析家は、臨床精神医学と臨床心理学の学習と経験を積む必要がある。医師も卒後研修として薬理学、神経学、精神医学の学習と経験を求められる。外国から来た候補生の場合でも、彼らの国での訓練委員会の承認を得ている必要がある。今日この件についての規則としているもののほとんどが、50年以上前に既にその基礎は築かれていたといえよう。

アメリカではこの件について目を見張る進展があり、そしてヨーロッパでは何人かの中心的な分析家たちが、訓練についての協力を求められていたことが報告された。大会では、APAがアメリカの諸協会の連合体として再組織化されることが承認された。APAはアメリカでの支部協会の監督する仕事や組織化の執行機関として機能していたからである。APAの推薦がある場合のみ、新たに支部協会がIPAに加盟することが認められていたのだ。その後APAは一つの支部協会ほどに縮小された。とはいえ、APAの会長はIPAの中央執行部に一議席もつこととなった。すなわち、三番目の副会長としてである。

ジョーンズは、EitingtonがITCの議長を続けている間、IPAの会長（彼はそのポストに5年以上にわたってついていたにもかかわらず）に選出された。第13回大会は、IPAの創設者であったフェレンチが亡くなり、彼に敬意が表され、1934年ルセーヌにて開催された。大会ではとくにAPAの再組織化が未だ完全にはなし終えられておらず、その地位は速やかに中央執行部に移譲されるべきことが望まれると言及された。事実これは実行に移され、APAの地位は、1936年にMarienbadで開催された次の大会で承認され、批准された。特にアメリカに関する決定で、大会での決議を経たものは、APAの拒否権に従うものとされている。かようにして、特別な地位と格別の自律性が、アメリカに与えられた。

戦前最後の大会は、1938年にパリで行われた。ジョーンズが、ウィーン協会はナチスのオーストラリアーそのほぼ半分併合のために崩壊したことを報告した。多くの会員がそこにとどまっていたのであった。彼は最後のAPAからの連絡で、あまた意見がある中ではあるが、IPAは管理・執行機関としての役割から退き、学術的な目的のみのための集会と転換していくよう提案があったことを報告した。ジョーンズはAPAの執行部と協議するための委員会を立ち上げることを提案し、同意された。しかしながら、結局のところこの件に関

してヨーロッパでは委員会が開催された形跡はあるものの、第二次世界大戦の勃発のために、アメリカの精神分析家たちとの間でいかなる会合もとりおこなわれることはなかった。

第二次世界大戦の終わりに向けて、Maresfield Gardens（ロンドン）にて、数名のアメリカの中心的な分析家たちとイギリス協会の何人かの会員たちとの間で、会合が行われた。その会合でジョーンズは、1932年以来ずっと（グローバーの助けを借り、やがてはアンナ・フロイトの助力を得て）IPAを運営してきたということのために、アメリカ人たちから個人的な批判にさらされた。とはいえ、最終的には彼は自分が全くのところ、ジョージ3世の生まれ変わりではないことを、彼らに確信させることに成功はした。後に、大戦が終わった後で、より公式的な会合がサボイ・ホテルで開かれたことが、ジョーンズによって後の大会にて報告された。1948年のこの時は、アメリカから7人の代表と、ロンドンからは6人の代表とが相対することとなった。IPAの地位について、なされる必要があった多くの変更がこの会議で合意された。もはやITCに関して言及されるどころではなく、実際のところその話は消滅したようなものだった。規約にとりいれられはしなかったが、紳士協定が結ばれ、それによって会長職は、アメリカからの代表とヨーロッパからの代表との間で代わる代わる務めることとなった。結果として、ジョーンズが15年の長きにわたって務めた会長職を辞したのち、Leo Bartmeierというアメリカ人の会長が選出され、ジョーンズは終身名誉会長に納められた。これは戦後最初の大会であるチューリッヒにて1949年に起こった出来事であり、その大会は1939年にフロイトが亡くなってから最初の大会でもあった。

1956年はフロイト生誕100周年にあたり、様々な形で広く祝われた。その中にはジョーンズによる一連の講義も含まれていた。パリでの大会では、新しいカテゴリーの組織がAPsaAのために創設された。地域の協会が、訓練において地域独自の自律性をもつこととなった。例えば、アメリカの一地域の協会はAPAの支部とされたが、そのAPAの会員である分析家たちだけがIPAの会員であるとみなされた。このようにして、長年にわたってヨーロッパとアメリカとの関係に付きまどってきた困難がどうやら納得のいく形で解決されたようだった。

1959年のコペンハーゲンの大会は、1910年以来ずっと参加してきたジョーンズが初めて姿を見せることはなかった。彼は1958年に死去していた。

1951年には、ジグムント・フロイト資料館The Sigmund Freud Archivesがニューヨーク州で法人化された。Kurt Eisslerが館長に就いた。館の目的は、フロイトの生涯と彼の科学的な関心に関するあらゆる資料を収集することだった。長年にわたり、資料館についての報告書がEisslerか副館長かによって、大会に報告された。しばしば非常に貴重な書簡やその

他の資料が寄贈され登録された。

1967年のコペンハーゲン大会で記憶すべきなのは、フロイトの心理学的業績についての標準版Standard Editionが完成したことである。

1971年大会は、ウィーンで開催された。すなわち、精神分析が誕生した都市で初めて大会が開催されたのだ。はからずも、それはアンナ・フロイトが1938年以来初めてウィーンを訪れた機会ともなった。会長であったLeo Rangellは、彼女にプレゼンテーションの機会を設けた。

1973年のパリ大会では、児童分析の訓練に関するRitvo Reportと、児童分析の訓練は受けつつも成人に関しては十分には訓練を受けていない者たちの地位に関して、非常に長い議論が交わされた。結局そのレポートは受け入れられなかった。それは現在ある制度を変えることはないことを意味していた。つまり、成人の精神分析について十分に訓練を受けた者だけが、IPAの会員となる資格を有することになった。この大会ではアンナ・フロイトが、1970年に亡くなったハインツ・ハルトマンに代わって、名誉会長の地位を与えられた。彼女は1973年から1982年に逝去するまで、名誉会長だった。

1979年では大西洋を越えて、IPAの大会が初めてニューヨークで開催された。IPAの会員はおよそ5000人に上り、さらに増え続けていることが報告された。さらに、精神分析的研究とリサーチのためのジグムント・フロイトセンターthe Sigmund Freud Centre for Psychoanalytic Study and Researchがエルサレムに設立されたことと、それに伴い彼の地のHebrew 大学に講座が設けられたことも報告された。ウィーンの19 Berggasseにあるthe Sigmund Freud Gesellschaft についても報告された。1968年の設立以来、そこは図書や資料を収集し、会報も出版しており、家そのものを博物館とするなど活発に活動していた。このことが公的に明らかにされたのは、1971年のウィーン大会においてであった。

1980年代以降、IPAはラテン・アメリカの精神分析家たちが増加したため、彼の地を第三の管理区域としてみなし、1991年に南アメリカでの最初の大会をブエノス・アイレスで開催した。会長職もまた、この第三区域から選出されることになり、最初のラテン・アメリカ系の会長として、1993年から1997年までHoracio Etchegoyen が務めた。

大会を開催することがIPAの基本となる活動であり、また、多くの会長たちがその発展において精力的な役割を果たしてきたことは言下のことであろう。しかし、その他、特に書記、会計の任に当たった者たちによって、またここ30年以上にわたっては中央事務局によって、IPAの仕事に対して莫大な貢献がなされてきた。この協会は、年ごとに会員を増やしてきた

だけではない。2009年の末には12000人の会員数に達するというが、それだけではなく、大会と大会の間でもますます活動的となっている。とりわけ、この世界の様々な地域において発展途上のグループに対する援助を提供したり、助言を与えることにおいてである。ベルリンの壁崩壊以降、IPAとヨーロッパ精神分析連合European Psychoanalytical Federationとの協力が深まり、解放後の元共産主義国家での新しい協会や研究集団が発展しつつあり、東欧精神分析インスティテュートへとつながった。1997年にはIPA国連委員会が発足し、1998年には国連経済社会会議に対してコンサルテーションを行う地位が承認された。

1910年に生まれ、IPAは今や成熟の域に至り、以前に比してますます本質的な意味で国際的internationalなものとなっている。2010年には第一回精神分析カンファレンスが中国で開催され、アジア文化という文脈での精神分析的な進展と変化が検討された。2010年はまた、IPAにとって重要な年でもある。創設100年の記念の年である。グローバルな規模で、精神分析のこれまでの100年とこれからの100年に向けての挑戦に焦点を当てた、多くのイベントが開催された。その中で、IPAの100年の歴史をたどった本が出版されており、精神分析の領域にある方には入手可能となっている。もちろん、非常に面白い内容となっている。ご希望の方は、我々の出版局のRhoda Bawdekarにその詳細をお尋ねください。：rhoda@ipa.org.ukまで。

William H.Gillespie(1982)による記事をもとに書かれた。

主たる資料：

- ・アーネスト・ジョーンズ：Sigmund Freud, Life And Work
- ・アーネスト・ジョーンズ：Free AssociationsZeitschrift fur Pschoanalyse
- ・International Journal of Psycho-Analysis